

関東山地秩父帯南縁から産する白亜紀放散虫化石—長野県南相木村御座山層・  
川上村川上層の例—

坂田澄恵（生物圏変遷科学1年）

近年の放散虫化石層序の詳細な検討により、中・古生代放散虫について多くの古生物地理学的な知見が得られている(De Wever et al., 2001)。特に世界的に広く分布する海成白亜紀層から産する保存の良い放散虫をもとに、古海流・古海洋・古気候学的な検討も行われている(Empson-Morin, 1984、高橋ほか、1994、等)。演者は関東山地秩父帯から産する白亜紀放散虫化石の群集解析をもとに、放散虫を含む地層の堆積環境復元を目指し、跡倉層（初谷層）、山中白亜紀層、秩父帯南縁域から産する放散虫化石群集の再検討をはじめた。今回、フォッサマグマ以东では最も西側に分布する秩父帯白亜紀層について、長野県南相木村御座山層（岩崎ほか、1984、1989）および川上村川上層（岩崎ほか、1989）から試料採取を行い、放散虫の抽出を進めている。ここではこれら地域の含放散虫岩の産状について述べ、今回新たに得られた資料と、従来の放散虫化石の報告を基に、放散虫動物群の年代、群集の特徴、他地域との対比についてその概略を述べる。

南相木村御座山層には暗緑色～灰緑色を呈する頁岩が分布する。これらはチャート、砂岩等のレンズ状岩体を含み、断層を介してシート状に分布する。岩崎ほか(1983)はこれらの頁岩から、*Acaeniotyle diaphorogona*, *A. umbilicata*, *Archaeospongoprunum tehamaensis*, *Alievium helenae*, *Eucyrtis tenuis*等の前期白亜紀(Hauterivian～Barremian)の放散虫を報告している。また、川上村の千曲川南方に分布する川上層はこれまで地層の露出状況が悪く、含放散虫岩の詳しい産状について不明なところが多かった。最近小川周辺の農地解析により、含放散虫岩の産状を観察できる新たな露頭が得られた。ほぼ南北に 500m に渡り、チャート、石灰岩、砂岩、玄武岩、緑色頁岩等の接触関係が観察できる。岩崎ほか(1989)は、小川沿いの小露頭から後期ジュラ紀放散虫を含むレンズ状チャート岩塊が、白亜紀前期の放散虫を産する黒色～暗緑色頁岩中に含まれている産状を報告している。この白亜紀放散虫群集には *Holocryptocanium barbui*, *Xitus spicularius*, *Thanarla conica*, *Archaeodictyomitra vurgalis* 等が識別でき、その年代は Aptian～Albian としている。

これら 2 地域の放散虫動物群については現在検討中であるが、産出する放散虫の *Nassellaria* と *Spummellaria* の割合、円盤状・海綿状殻を持つ放散虫の割合、特定な種の産出により、含放散虫岩が堆積した深度、緯度、陸域からの距離等具体的な堆積環境の復元が可能と考えられる。これらの知識を基に、白亜紀における跡倉層、山中白亜紀層、秩父帯南縁域の堆積の場について考察を行いたい。